

第4回国際分子病理学シンポジウム（ウルムチ・トルファン会議）

2006年8月5日-12日、新疆ウイグル自治区、ウルムチ、トルファン、中国

中国医科大学主催

鹿児島大学共催

中国側会長：賈心善（中国医科大学）

日本側会長：蓮井和久（連絡役、鹿児島大）

学術部門世話人

名倉宏（東北大学）

朔 敬（新潟大）

阿部正文（福島県立医科大）

秦 順一（国立小児病院研究所）

長村義之（東海大）

大井章史（山梨医科大）

社本幹博（藤田保健衛生大、八千代病院）

堤 寛（藤田保健衛生大）

井内康輝（広島大）

菊池昌弘（福岡大）

竹屋元裕（熊本大）

米澤 傑（鹿児島大）

蓮井和久（鹿児島大）

文化交流の世話人

佐藤榮一（鹿児島大）

連絡先

蓮井和久

鹿児島大学大学院医歯総合研究科感染防御学講座免疫病態制御学分野
（旧医学部解剖学第2講座）

890-8544 鹿児島市桜ヶ丘 8-25-1

TEL/Fax 099-275-5218

FAX 099-265-9721

E-mail: kazhasui@m2.kufm.kagoshima-u.ac.jp

連絡先（中国側）

賈 心善（中国医科大学）

中国医科大学病理教研室

1 1 0 0 0 1 中国遼寧省沈陽市和平区北二馬路92号

電話 86-24-23256666-5312

Email xinshanjia@yahoo.co.jp

第4回国際分子病理学シンポジウム報告

蓮井和久

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科健康科学専攻
感染防御学講座免疫病態制御学分野（旧2解剖）
2006年8月5日-12日、ウルムチ・トルファン会議

第2回、第3回と学術部門の参加者の減少を見る国際分子病理学シンポジウムは、ウルムチとトルファンでの開催の第4回シンポジウムを迎えるに当たり、助成を鹿児島大学本部国際事業課の協力を得て、国際協力銀行(JBIC)に助成を求めたが、結果として、中国医科大学主催、鹿児島大学共催の形で、鹿児島大学学長裁量経費からの助成を頂き、開催された。そして、第4回国際分子病理学シンポジウム（ウルムチ、トルファン会議）は無事終了した。

1、出発

2006年8月5日に、名古屋、関西、福岡から北京に集合した日本側参加者も、夕食時には、全員集合し、日本側が結団した。

北京：浮塵（微細な砂？に結露して霧となる。）

により、太陽も

スリガラス越し見るようであった。この中で、たこを上げる人々がいた。釣り糸のリール様の糸巻きでたこを操っていた。レストランでは、観光客向けの味付けの中華料理を頂いた。宿泊したのは現代的なホテルでした。

翌日（8月6日）、浮塵（微細な砂？に結露して霧となる。）にて、ウルムチ行きの飛行機は50分余り出発が遅れたが、無事に、ウルムチに到着した。

到着後、紅山公園からウルムチ市街地を見て、近代化しつつある200万都市を実感した。ローランの美女（ミイラ）を陳列する国立新疆自治区博物館を視察し、この新疆自治区がかつてのシルクロードの主役であった時代があることを再認識し、ホテルにチェックインした。



ウルムチ：ウルムチには高層ビルの立ち並ぶ中心街を見た。また、高速道路も整備されて来ている。時差はあるが、北京時間に準拠しているので、7時にホテルの部屋から、日の出を見ることが出来た。



その夜、組織委員会（シンポジウム前会議）を宿泊ホテルの会議室で行い、中国側から突然の新疆医科大学の会場が使用できなくなり、新疆医科大学近くの賈心善教授の宿泊しているホテルの会議場でのシンポジウム開催と政府系ホテルの宴会場での懇親会の開催を知らされた。今回の中国医科大学主催、鹿児島大学共催の経緯と鹿児島大学長裁量経費からの助成とそれからの鹿児島大学長賞の説明を行うと共に、また、中国側の次回開催地に関する意見を聞いた。

2、シンポジウム

8月7日に、時差と午後のシiesta（長い昼休み）の関係から、10時スタートのシンポジウムが開催された。

開会式では、賈心善教授中国側会長の開会の挨拶の後に、鹿児島大学永田行博学長の抄録集に掲載された挨拶文を私が代読した。

その後に、国立歴史民族博物館の日高薫助教授の日本で発達した漆の金蒔絵の技法がシルクロードが逆行して中国王朝で珍重され、模倣されたことに関する講演があり、記念写真を撮影し、学術部門のシンポジウムが実施された。

シンポジウム：会場のホテル前で記念写真、開会式の賈教授の挨拶、鹿児島大学長の挨拶の代読、日高薫先生の講演、井内教授の講演

2-1、シンポジウム講演

大変、立派な抄録集が出来たのだが、中国流の抄録作成で、今回のシンポジウムで実際に発表された演題は以下のものであった。

鹿児島大学長賞選考は、当初、日本側での実施を計画したが、抄録集に記載された発表の中の13演題の発表であったことから、シンポジウム終了後に、佐藤栄一名誉教授

と賈心善教授による協議にて行われ、中国側6名、日本側1名の発表された演題に授与されることになった。番号の前に○印のある演題に、鹿児島大学長賞が授与された。



1. ○ **Cultural lecture** in Japanese (translation to Chinese by Xinshan Jia) : **Kaori Hidaka** : "Woqi": Cultural exchange of lacquer between China and Japan
2. **Special lecture** : Kouki Inai : Mesothelioma in Japan with special reference of accurate pathological diagnosis
3. ○ **Special lecture** : **DongPing Tian** : Esophageal and cardiac cancer in Chaoshan region of China
4. **Lecture** in Chinese (translation to Japanese by Parhat) : **Caili Han** : Study on the function of P38MARK in gastric carcinoma cell line and its relationship with COX-2
5. **Lecture** : **Kazuhisa Hasui** : Immunohistochemical analysis of programmed cell death in synovial tissue with rheumatoid arthritis
6. ○ **Lecture** : **Yujie Zhao** : Research Cytochip for leukemia immunophenotyping

7. **Lecture : Hiroshi Nagura** : Palatine tonsils in IgA nephropathy
- 8.○ **Lecture: WeiXia Zhong**: The clinicopathology and immunohistochemical features in solid-pseudopapillary neoplasm of pancreas
9. **Special lecture : Yutaka Tsutsumi** : Immunohistochemical demonstration of apoptosis in paraffin sections of colon cancers, with special reference to cells expressing both apoptosis and cell proliferation markers
- 10.○ **Lecture : Gao YanLi** : Quantitative study of cell proliferation and apoptosis in the development of neural tube defects caused by hyperthermia
- 11.○ **Lecture : Yfu Huan** : High fidelity probes of oligonucleotide microarray
12. **Lecture : Teruhisa Okumura** : An adult case of Epstein-Barr virus (EBV)-associated T/NK-cell lymphoproliferative disorder, A report of an autopsied case
- 13.○ **Lecture : Xin Yan** : Relationship between survivin expression and the pathological behavior of gastric carcinoma

2-2、参加者

- a) 日本側（16名）
 1. 名倉宏教授（名誉教授、仙台大学（東北大学））
 2. 名倉宏教授婦人
 3. 堤寛教授（藤田保健衛生大学）
 4. 井内康輝教授（広島大学）
 5. 高橋潔名誉教授（熊本大学）
 6. 高橋潔名誉教授婦人
 7. 佐藤榮一名誉教授（鹿児島大学）
 8. 佐藤榮一名誉教授婦人
 9. 早田隆教授（鹿児島女子短期大学）
 10. 早田隆教授婦人
 11. 奥村晃久部長（鹿児島生協病院）
 12. 蓮井和久講師（鹿児島大学）
 13. 日高旺元鹿児島テレビ社長（KTS）
 14. 日高旺元鹿児島テレビ社長婦人
 15. 日高薫助教授（国立歴史民族博物館）
 16. 野添良隆院長（中央ビル野添歯科医院）
- b) 中国側参加者（中国側事務局報告、26+ α 名）
 1. Prof. Xinshan Jia (China Medical University)
 2. Prof. Yifu Guan (China Medical University)
 3. Lect. Jiafeng Yang (China Medical University)
 4. Prof. Yan Xin (China Medical University)
 5. Prof. Yujie Zhao (China Medical University)
 6. Asso. Prof. Yfu Huan (China Medical University)
 7. Prof. Jialun Wang (Shenyang Medical College)
 8. Asso. Prof. Ling Zhang (Shenyang Medical College)
 9. Prof. Cuifang Wang (Shenyang No.8 Hospital)
 10. Lect. Xiaoling Li (Liaoning Province Tumor Hospital)
 11. Prof. Jinlong Ma (Xinjiang Medical university)
 12. Miss. Li Gao (Xinjiang Medical University)
 13. Prof.. Parhat (Xinjiang Medical university)
 14. Prof.. Chen Xiao (Xinjiang Medical University)

15. Miss. YingNan (Xinjiang Medical University)
 16. Prof. Hongyan Dai (Xinjiang Medical University)
 17. Mr. Weizhen Tian (Xinjiang Medical University)
 18. Mr. Liyang Sun (Xinjiang Medical University)
 19. Prof. Dongping Tian (Shantou University)
 20. Mr. Xiuhuai Cao (Fuoshan People's Hospital)
 21. Prof. Caili Han (Hebei Medical University)
 22. Miss. Jinying Wei (Hebei Medical University)
 23. Mr. Guoping Zhong (Ningbo People's Hospital)
 24. Miss. Jihong Zhao (Dongwan People's Hospital)
 25. Prof. Weixia Zhong (Shandong Tumor Hospital)
 26. Miss. Xiaoting Li (Beijing University)
- 他に若干名

2-3、新疆医科大学

新疆医科大学のモニ
ュメントと新旧校舎

シンポジウムと懇
親会の際に、新疆医
科大学の構内に見学
した。入り口を入る
とぶどう棚の歩道を
伴う大きな通路の両
側に建物があった。
以前にロシアの協力
で建設された施設の
改築が進んでいる段
階のようだ。ホール
らしい建物には、教
育評価委員会会議の横断幕がかかり、これによりシンポジウムの会場の変更があったのか
なと思われた。



シンポジウムで私の発表の座長をして頂いた Parhat 教授（新疆医科大学副学長、薬理学・生理学主任）と話す機会があった。Parhat 教授は、山田勝士教授（附属病院薬剤部長）が福岡大に在任されていた頃に、大変、お世話になった旨を話され、また、可能であれば、鹿児島大学と大学間協定を結びたいと言われた。

また、新疆医科大学の病理学主任の Jinlong Ma 教授は、2年間の契約で中央から派遣された方で、2ヶ月後には山東省の腫瘍病院の病理に転出の予定だそうだ。

2-4、懇親会

懇親会での鹿児島大学長賞の授与式(佐藤栄一名誉教授提供)



懇親会は、政府系ホテルの広いイスラム系建物の中庭様のロビーを有する宴会場で行われた。

この懇親会の中で、鹿児島大学長賞の授賞式を行った。賈心善教授が受賞者を呼び、佐藤栄一名誉教授が鹿児島大学長賞の伝達を行い、私が学長裁量経費の助成からの講演料を手渡した。

3、ウルムチ近郊視察

翌日（8月8日）は、ウルムチの近郊を視察し、砂漠、草原、そして、高地からなる複雑な地形が理解出来ました。その高地は天山山脈で、そのボコダ山には万年雪が見られました。ウルムチは、天山山脈の盆地に位置し、



ウルムチの北には、森林地帯から山岳地域に以降し、その森林地域の中に天地と云う湖のある景勝地があり、ウルムチの南には、砂漠地帯から草原地帯、氷河のある山岳地帯があった。その草原地帯では、ひまわり畑が広がっていた。

ウルムチのバザール：昔の面影が無くなったとは云え、旅行者には、ここがイスラム文化圏の商業区域であることが体感される。



ウルムチのシiestaの時間（午後2時から4時）の気温は34.5℃であったが、乾燥しているせいかそれ程に暑く感じなかった。しかし、直射日光に当たると相当に疲れを感じ、シiestaがある理由を体感した。

ウルムチの町中では、午後9時半まで明るく、暗くなってから、涼を求めて、人々が広場に集まる。大型スクリーンで映画を楽しむ者、ローラースケートを楽しむ子供たち、屋台でシシカバブーとアルコールを楽しむ大人たち、などなど。

4、トルファン視察

アジア最大規模のオランダとの合弁による風力発電施設とトルファンのホテル

その翌日(8月9日)に、トルファンにバスにより高速道路で移動した。移動中に、砂漠地帯に入り口にアジア最大規模のオランダとの合弁による風力発電



施設を高速道路から見た。砂漠の中のオアシスであるトルファンに3時間余りで到着した。イ



スラム風の江沢民前国家主席も当地を訪問した時に宿泊したと云うホテルにチェックインして、シiestaの休憩の後に、カルーズ（古代井戸）、交河古城とこの地域のイスラム系の王様のイスラム教会を視察した。夕食後には、井上靖が逗留して紹介したトルファン賓館の音楽と踊り楽しんだ。

カルズ（古代井戸）博物館

カルズの連絡水路トンネルの建設は太古より続けられて来たもので、砂漠のオアシスの生命線である。

カルズ（古代井戸）には、その連絡水路トンネルと水路トンネルの広い部分では、天山山脈からの地下水の水路に5℃の水が流れ、人家近くでは涼をとる空間があったようである。しかし、この水路を作る人々には、冷たい水に浸かった仕事の関係で関節の病気が多かったそうである。

交河古城

交河古城は、世界遺産に登録したいとのことであったが、その荒廃は酷いようだ。その見晴らしの良い所まで、約500m程度の道のりで、40℃以上の気温を体感し、瞬間に熱射病直前の状態であった。NHKの新シルクロードでのモーターハングライダーからの魅力的な映像の遺構を実際に体感しても、その暑さで、早々に冷房のきいたバスの中へ避難したい衝動にかられた。



トルファンの音楽と踊り：トルファン賓館：中央アジア独特の音色の楽器とその音楽、コザックに似た軽快なステップの男性の踊り、女性の踊りには、いつのまにか5段に重ねた湯飲みを頭に軽快踊る中国雑技団の趣きもあった。女性の踊りのかけ声もかなり日本と異なるようだ。最後は、一緒に踊り、一緒に写真を撮らせてもらった。



砂漠地帯に林立しはじめた石油井戸と高昌古城（かなり崩壊が著しい）

その翌日(8月10日)は、早朝に、高昌古城、アスタナ古墳群、火焰山、その端のバイズクリフ千仏洞を視察した。その地域に行く道すがら、石油井戸が多数見られた。この新疆地域は、シルクロードの遺物で知られているが、古代のカルーズの下に天然ガスと石油が眠っていたそうである。天然ガスは既にパイプラインが作られ上海に供給され、トルファンの町は現在この天然ガスと石油に支えられているそうである。表面上では古びたシルクロードの



遺物の眠るオアシス都市であるが、その現状は外観からは理解できないようである。中国の石油資本は、この地域の発達を支える責務を負っているものと考えられた。

高昌古城は、交河古城が岩盤を削って作られた街であるのに対して、土を固めて作られたことから、廃墟と化した後は、その建物の土が耕作用の土に転用されて、その遺構はほとんど残っていない状況である。

アスタナ古墳群

この砂漠地帯では、漢族の墓は、墓石（碑）の存在で、回教（イスラム教）の人の墓はその独特な建造物で識別できる。アスタナ古墳群は、現代の墓地が隣接し、この墓地が太古からこのオアシスで維持されて来たのが理解できる。



バイズクリフ千仏洞

火焰山の端に位置するバイズクリフ千仏洞では、日本の美大の学生さんが酷熱の中で写生に打ち込んでいた。



所謂、「顔に泥を塗る」（仏教からイスラム教への移行で、この多くの仏教仏画の顔を泥を塗り潰したことに由来）と「袖の下」（ソグド人が袖の広い仏教の神に貢物を袖に入れている仏画がある。）の語源とされる仏画が見られた。

ぶどう農家

午後は、トルファンの友誼商店様の店を訪ね、また、ぶどう農家を訪ねて、新鮮なぶどう、スイカ、マスクメロンを食した。ぶどう農家に居間には、この地方の紋様のじゅうたんが敷かれ、庭先の藤棚の下で涼をとっていた、昔はこの農家にもカрузがあり、そこで涼



ととっていたそうである。この農家の周囲には、ぶどう等を乾燥する独特な日干しレンガの建物が並木の中に見られた。

5、シンポジウム後会議

トルファンの午前の視察から帰り、ホテルの会議室にて、シンポジウム後会議を、佐藤（鹿児島大学名誉教授）、名倉（東北大学名誉教授）、堤（藤田保健衛生大学教授）、井内（広島大学教授）、野添（中央ビル野添歯科院長）、日高（元 KTS・南日本新聞社長）と私で開催した。

従来は、この会議は次回開催地を決めるだけのものではあった。しかし、今回は、

- 1) 政府系金融機関に助成を求める過程で明らかになった助成を受ける為の準備
 - 2) 次回の開催地、
 - 3) 次回の開催時期
- を決める必要が生じた。

助成を受ける為の準備に関して、今回の経過を私が先ず説明して、a) 今回の抄録集でも問題になった発表のない抄録の代わりに、参加者の施設に3ヶ月程度の高等教育コースを設定して、その説明を抄録集に加え、日中相互間での共同研究の促進を促す基盤作りを行い、政府系金融機関からの助成への準備とすること、b) 病理学会への病理専門医の更新ポイントの導入を申請して、学術部門の活性化を図ることが決まった。

次回の開催地に関しては、西寧ーラサ会議、ロシアーハルビン会議、日本〈鹿児島〉会議案が検討され、次回開催は日本〈鹿児島〉案が採用された次回の開催時期に関しては、やはり、2008年北京オリンピック年は避けるべきであろうとなり、2007年開催が決定した。

このシンポジウム後会議の決定は、その後、中国側の会長の賈心善教授〈中国医科大学〉に打診し、了解された。

6、帰国

8月11日は、新疆から北京への移動日で、トルファンを朝7時に出発し、11時過ぎにウルムチの空港に到着し、3時間余り飛行で、午後5時に北京空港に到着した。

北京ダック料理の老舗
中国の最後の
晚餐と、北京
ダック料理を
老舗で堪能し
た。



翌日〈8月12日〉、帰国した。